

民国家論で論じられる傾向があった東南アジア大陸部の戦争を、ローカルな政治組織に着目して論じたことである。本書で登場する様々な民兵集団（ヴァンパーオ軍、雲南反共救国軍、「赤い野牛」派、シャン軍、タアーン民族解放軍など）は、冷戦や国民国家を背景として成立しつつも、正規軍とは異なる独自のアクターとして、戦争の状況や地域住民の生活を左右した。こうした政治組織の存在は、20世紀後半の東南アジア大陸部の戦争の背景に、冷戦イデオロギーやナショナリズムという外在的要因のみならず、脱植民地化後に国境線内に編入された、多様で複雑に入り組んだエスニシティや宗教などを、国家に統合してゆく際に生じた地域内在的な問題が深く絡んでいたことを明示する。その一方で、タアーンの事例が示すように、特定の住民の利益と権利を主張する政治組織は、必ずしも、その主張の対象となっている個々の住民達の考えと一致しているわけではなく、むしろ忌避される場合もある。他方で、歴史的な経緯により、対立しあうカトリック教会と国家の中間に位置し、マージナルな存在へ落とし込まれていた個人（L 翁）が、彼の自宅でのクリスマス礼拝という「一定の距離感をもって協働する場」（pp. 288–290）を提供することで、個人、教会、国家の3者関係を変えてゆく場合もある。

以上の本書の意義を考えると、序論と「おわりに」では議論されていないものの、議論をさらに深化させようと思われたのは、複数の各論によって言及された私的・公的領域の問題である。東南アジア大陸部の大部分は戦争が1980年代後半以降に収束してゆき、タイを除く国々では社会主義経済から市場経済へ移行した。この過程で、地域住民が国家政策から逸脱して行っていた政治的、経済的、宗教的な諸活動を、国家が徐々に許容・包摂してゆくが、地域住民と国家の間で私的・公的領域の再編成が起こっていたと考えられる。公私の再編がどのように起こってきたのか、ジェンダーの問題も絡めて論じることで、東南アジア大陸部の戦争という題材が、現代という時代・状況のなかで再考され、新たな議論へと展開してゆく可能性がある。

（下條尚志・静岡県立大学大学院国際関係学研究科）

参考文献

- 秋田 茂；桃木至朗. 2016. 「序章 グローバルヒストリーと戦争」『グローバルヒストリーと戦争』秋田 茂；桃木至朗（編），1-22 ページ所収. 吹田：大阪大学出版会.
- アンダーソン，ベネディクト. 2007. 『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石 隆；白石さや（訳）. 東京：書籍工房早山.（原著 Anderson, Benedict. 2006. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Revised ed. London and New York: Verso.）
- スコット，ジェームズ・C. 2013. 『ゾミア——脱国家の歴史』佐藤 仁（監訳）. 東京：みすず書房.（原著 Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.）
- 下條尚志. 2014. 「メコンデルタにおける支配をめぐるせめぎあい——地域社会の人々のローカル秩序と回避の『場』（1976～1988年）」『東南アジア研究』51(2): 227–266.
- . 2016. 『戦争と難民——メコンデルタ多民族社会のオーラル・ヒストリー』東京：風響社.

土佐桂子；田村克己（編）. 『転換期のミャンマーを生きる——「統制」と公共性の人類学』風響社，2020，330p.

ミャンマーで民政移管が起きて10年になる。その間に同国はずいぶん変わった。ヤンゴンではショッピングモールやコンドミニアムが年々増えているし、ひどい渋滞があちこちで発生している。読むのが苦痛なほど退屈だった国営紙だけでなく、民間の新聞が発行されるようになった。みなスマートフォンを持つようになり、主にフェイスブックを通じて多様な情報に日々接している。反政府的な意思を表明する集会やデモもできる。政治亡命していた人々が帰国する一方で、仕事や留学目的で海外に渡航する人たちが増えている。

そんなものもなかったのか、と思われる人も少なくないだろうが、閉鎖的で停滞していた軍事政権時代を知る人にとっては、こうした変化のひとつひとつが驚きなのだ。

こうした変化全体を俯瞰したとき、ミャンマーにいったい何が起きていると言えるだろうか。国家による社会の統制から、公共性の拡大へと転換が起きていると本書は主張する。ここでの公共性とは、ナンシー・フライザーにしたがって、複数の存在を前提とした、「国家に批判的になりうる言説と生産と流通の場」(p.7)のことである。公共圏、市民社会という言葉もほぼ同じ意味で使用されている。

公共性を一貫したテーマとしているものの、評者にとって興味深かったのは、その概念では切り取れない現実の多様さである。各章ともに、公共性の多面性や、不安定さに目を配っており、フィールドワークで得た情報がそれぞれの論述に説得力を与えている。以下、章の順序にこだわらずに内容を見ていこう。

本書では統制が括弧書きの「統制」になっている。それは、統制という言葉が直感的に喚起するイメージ、すなわち、「抑圧する国家と抑圧される人々」という単純な構図と実態との間にズレがあるからだろう。田村克己『『経験』された統制』(以下、章タイトルの副題は省略)では、現実の軍政政権下の統制が、著者の実体験とともに描かれる。1970年代末のミャンマーで、人類学者である著者が、村落共同体に入り込んでいくなかで垣間見たのは、共同体としてのまとまりというよりも、個人的紐帯(著者がいう「親しさ」)の束が編み込まれた複雑な関係性であった。そのなかに組み込まれることで、国家の統制からは比較的自由になれるという。しかしながら、今度は共同体による著者の行動への統制がはじまる。

村落共同体の複数の顔については、飯國有佳子「軍統制下における農村の公共意識と宗教」にも詳しい。軍政時代、確かに統制は村落レベルで存在し、村人を組織化する官製NGOが統制の手段としていくつもつくられた。しかし、官製NGOの多くは、かたちばかりでまともに機能しておらず、その一方で、村人が自発的に運営する組織は、村落

内の集団的な活動として細々と続いていたという。葬式協会、自衛消防団、仏教管理委員会のような組織だ。つまり、軍政による統制は、人々の自発的な協力には失敗しており、消極的な従属を引き出すことしかできなかった、といえそうである。

そうした消極的な従属も、時には限界点に達し、政府への積極的な抵抗に転化した。1988年の大規模な民主化運動はまさにそれだった。国軍兵士に対峙するデモ隊の姿は、国家と市民社会との対立をわかりやすく示すが、ここでも単純な二項対立は否定される。伊野憲治「民主化運動における『対抗的公共圏』の成立過程」によると、デモ隊が代表するような政府に抵抗する集団や場(対抗的公共圏)にもさまざまなものが存在した。概して、独立した個人の自発的な集まりというよりも、特定の指導者に集う人々であった。それが果たして民主的な集団かといえば、少なくとも西洋モデルの市民社会ではないだろう。

2011年の民政移管後に、自由化へと舵が切られたことで、人々が享受する自由は格段に広がったが、その自由がもたらす社会不安もまた広がった。テッテツヌティー「ミャンマーにおけるフェイスブックと公共性の構築」が示すように、ミャンマーではフェイスブックが公共性を生み出す新しい技術的な手段を提供した。その一方で、新しい通信技術は他者への不寛容を表明する機会にも用いられた。

自由化により、ミャンマーではいくつかの社会的亀裂が表面化した。そのうち、仏教徒とムスリムとの対立が世界的に注目を集めた。本書の3つの章が宗教的な共同体に関連するものであるのも、それを反映してのことだろう。ただし、どの章も2つの宗教の対立という構図ではみえていない。もっと広い文脈に対立を位置づけていて、問題が立体感をもってたち現れる。

土佐桂子「説法会を核とする仏教公共性」は、民政移管による仏教説法会の変容を詳細に検討している。説法会では、ときに政治的な志向のある僧侶たちが反イスラーム的な説法をおこなうのだが、その説法の分析がなんと興味深い。反イスラーム的な説法のほとんどは悪意の直接的な表現ではない。經典解説と説法師による寓話を往復し

ながら、暗喩に満ち、聴衆の笑いや、拍手、合いの手、掛け声が相交じることで、僧侶と在家信者との間の双方向的なメッセージの確認作業になるという。仏教を縁につなげる出家者と信者との公共空間がそこに誕生するのだ。

ここで注意が必要なのは、反イスラーム的な言説の拡大に励む政治的僧侶が、全体でいえば少数だということである。呼応する在家信者も多くはない。藏本龍介「仏教を結節点とした『つながり』とその変容」が仔細に明らかにするように、僧侶の一部で政治化が進んだ一方で、宗教化、つまり世俗的な事象から距離を置くことを望む僧侶や在家信者の声も目立つようになった。だが、政治と距離を置くことが公共性の不在を意味するわけではない、というのが本章の主張の肝である。仏教を軸に形成される「法友」(ゲンマ・メイッセエ)が別の公共圏として拡大していくからである。

ムスリムのコミュニティも複雑な動きを見せている。斎藤紋子「民主化による新たな試練とムスリムコミュニティ」によると、ミャンマーのムスリムコミュニティは、それまで目立たない存在として生きる「自主統制」を基本的な態度としていたという。しかし、次第に宗教間対話のような社会活動に積極的に乗り出すようになっていく。むしろ、その道のりは険しく、「多宗教的公共性」はまだまだ先の話だと著者はみなしている。

少数者といえば、ミャンマー全土に多くいる少数民族もまたそうだろう。高谷紀夫「“ガラスの多文化主義”と少数民族のパブリシティ」が焦点を当てるシャン(タイ)の間では、公共性の萌芽がパブリシティ(文字情報、視角情報、身体的パフォーマンスなどを媒介として構築あるいは再構築され、さらに共有化される知的表出の状況)の増大に見られるという。しかし、斎藤の章と同様に、多民族間の平等な関係が実現するまでの道は長いことが指摘されている。ビルマ民族が文化的表象の中心であり、多文化主義の実現をはばむ「ガラスの壁」が存在するためだ。

さらに人口の少ない民族はどうだろうか。シャン州で自治区が認められているタラインは、民政移管の時点では連邦政府と比較的良好な関係を築いていると考えられていた。ところが、武装組織で

あるタアン民族解放軍(TNLA)が結成され、国軍との戦闘がはじまってから状況が一変する。茶産業の集積地として知られてきた自治区の中心地ナムサンは、戦闘のあおりを受け、停滞を余儀なくされた。生駒美樹「少数民族組織の活動にみる統制・公共圏・共同体のありよう」は、このタラインの関連する複数の社会組織の活動やネットワーク、鍵となる概念を丹念に分析することで、拡大と不安定を経験したタラインの実像を描く。

以上のようにミャンマーで拡大する公共圏を、本書では比較の週上にも載せる。

岡本正明「セキュリティ民営化とインフォーマルな国家統制」は、インドネシアとの比較を念頭に、国家の独占を原則としてきた治安や安全保障がミャンマーで次第に市場経済化の対象となっていく過程を明らかにする。民間警備会社が急速に成長し、そこでは元治安機関関係者が要職を占めた。インドネシアに比べるとまだまだ萌芽的な動きだが、ミャンマーでもこれから都市化などに伴って治安への人々の不安が募り、セキュリティプロバイダーの多様化と民営化が進むことは間違いなさそうである。

松井生子「他者化された人々と公共的なもの」は、カンボジアに住むベトナム人がクメール人村落の公共的な場から排除されていることを指摘する。彼らは国籍の取得を厳しく制限されており、さまざまなかたちで不自由な生活を余儀なくされている。村落内では、ベトナム人の公共圏と呼べるような社会関係はわずかながら存在するものの、クメール人との相互交流は乏しい。ミャンマーに関する章には欠けている、国籍を持たない人々への視点を本章が提供している。

田村慶子「シンガポールの多文化主義による『統制』と新たな空間の創出」では、シンガポール政府が、華人、マレー人、インド人、その他、という4つの分類に基づく多民族国家であることを標榜しつつ、その誰の言語でもない英語を共通語としてアイデンティティを統制しようとしてきたと指摘する。この多文化主義と統制との相克のなかで、次第に各エスニシティが独自の民族的表現をする場が増えている。しかしその一方で、外国人居住者への強い反発も見られる。ミャンマーのよ

うに、多数民族の言語を標準語とする言語政策では、なおさら多文化主義の実現は難しくなるだろう。

冒頭に述べたように、本書全体を見渡して魅力的なのは、統制、転換、公共性といった言葉では捉えきることができない現実の複雑さへの目配りである。軍政のくびきから逃れた人々の行動が、ミャンマーの何を変えてきたのか、これから何を変えするのか、さらなる分断に向かうのか、統制へと逆行するのか、思わぬかたちで共生への道を探り当てるのか、こうしたことを考える上で、本書がよい出発点になるはずである。

こうした問題意識をさらに発展させるための課題とは何だろうか。本書のように、公共性や公共圏を広く定義すると（「国家に批判的になりうる言説と生産と流通の場」）、現在のミャンマーでは、あらゆるところに公共圏が発生していることがわかる。軍事政権が約50年間にわたって市民社会を強権的に抑え込んできたのだから、その統制が緩んで、市民の多様な声が発せられるようになるのは当然のことかもしれない。

ただその一方で、公共圏は国家の統制が緩和されると自動的に発生するものではなく、国家から自律的な組織だけを意味するわけでもない。ハーバーマス流の市民社会論に従えば、公共圏は世俗的で共和的なものである。この特質はミャンマーの公共性や公共圏の事例には当てはまらない。本書で扱われている公共圏は、世俗的でもなければ構成員間の平等な関係だけで成り立ってもいない。どの章が扱う公共圏も、その内部の社会関係は、宗教的な上下関係があったり、民族という疑似的な血縁関係にもとづいていたり、権力関係が格差を規定していたり、暴力を内包したりする人のつながりである。公共性という言葉でまとめるには中身が多様だろう。ミャンマーの公共性や公共圏が持つ思想的背景や特質については、もっと踏み込んで議論できそうである。

場合によっては、公共性や公共圏という概念を分析概念としては使用しないというものひとつの選択かもしれない。本書でも引用されているコマロフ夫妻の言葉、すなわち、市民社会とは「社会的想像力をかき立てるイデオロギー的比喻」に過

ぎない、という指摘は、評者も常々感じるところである。公共性、公共圏、市民社会という言葉は便利な反面、そこに含まれる現象が大きすぎて、分析的に有意義な発見をもたらさないときがあるからだ。

同時に、ミャンマーでは、この10年間に、公共性、公共圏、市民社会という言葉が使われるようになり、社会的な行動や運動を動機づける理念にもなっている。この理念としての公共性に検討を加えることも必要だろう。

民主化の進展と経済成長によって、ミャンマー社会はめまぐるしく変化している。研究がそれに追いつくのに苦勞する時代になった。変化のスピードや、変化の不確実性といったものをとらえるための新しい概念が必要となり、またその一方で、新しい概念の分析もまた必要である。分析概念と概念分析、それぞれを考えるうえで本書はさまざまなヒントを与えてくれる。

（中西嘉宏・京都大学東南アジア地域研究研究所）

橋本 彩.『ラオス競漕祭の文化誌——伝統とスポーツ化をめぐる』めこん、2020、286p.

毎年、出安居祭の翌日に、ラオスの首都ヴィエンチャンでは競漕祭が盛大に開催される。このヴィエンチャンの競漕祭に関して、1990年代後半から2000年にかけて「伝統」をめぐる論争が起こった。そこでは、競漕に「スポーツ」的要素が侵入したことにより、競漕祭の「伝統」が損なわれたとの主張がなされ、その際、伝統を阻害する要因としてしばしば言及されたのが、「キラー（ラオ語でスポーツの意）」と「タイ」であったという（pp. 9-10）。

本書は、ヴィエンチャンの競漕祭が、社会との相互作用の中でどのような歴史的変容を遂げてきたのか、「伝統」、「スポーツ」、「タイ」の3つのキーワードをもとに明らかにし、ラオス競漕祭の文化誌を描こうとするものである。